連載 東日本大震災について

福島県双葉町を離れて
―私の3月11日―

福島県・双葉町社会福祉協議会 渡邉 ゆかり

1．3月11日に何が起きたのか

私は福島県双葉町に生まれて、高校までの18年間双葉町で過ごした後、淑徳大学社会福祉学科に進学した。卒業後は地元双葉町に戻って、双葉町社会福祉協議会（以下、社協）に就職し、10年という節目の年を迎えていた平成23年3月11日、大震災が発生した。地震・津波・原発事故と過去に例をみない、複合大災害を経験した。それから先は今まで経験したことのない日々の連続だった。

私が勤務する社協は町の健康福祉の役割を担う「ヘルスケアーふたば」内にあり、1階は社協事務所の他、一般の町民が利用できる健康増進・介護予防施設、2階は町で唯一のデイサービスセンターがあり、毎日たくさんの町民が利用していた。

当時私は、居宅介護支援事業所に在籍していた。訪問に出かける時間になり、席を立ち、歩き出したその瞬間に大きな揺れがきて、同時に床に投げ出されてしまった。立ち上がろうとしても身動きができず、まるで氷上にいるように身体が揺れと同じ方向に滑った。最初の揺れがおさまると「デイサービスセンターに助けに行かなければ」との思いで、私は2階に向って走っていた。周りを見ると他の職員もいたが、続く余震で事務所の棚が倒れ、棚や机の物が落ち、止まることのない激しい横揺れで足止めをされた。階段を上りながら携帯電話で子ども達の安否確認を行ったが、電話も携帯電話も通じず、私の頭の中はさらに混乱し何が何だか分からなくなった。何とか2階にたどり着き、そこで見た光景はやはり、ひどく散乱した惨状だった。しかし、デイサービスの利用者はリハビリのためホールにおり、落下物によるケガ人もなく、50数名の利用者全員が無事だったのが奇跡だった。

デイサービスで支援を行っていたが、それればかりに集中してはいられなかった。「ヘルスケアーふたば」は災害時の避難所となっているため、その準備にも取り掛からなければならなかった。すぐに津波や地震の被害で多くの町民の方が避難してきた。なかには津波で流され全身びしょ濡れになりながら助けを求めてくる人や、地震でケガをされた人等も少なくなかった。避難所の運営には町役場職員が応援に来てくれ、ケガ人は町の保健師が対応をしてくれた。しかし、私たち社協職員も町の職員も防災訓練は行っていたものの、実際の避難所運営は初めてだったため、悪戦苦闘しながら対応に追われていた。

地震により町内は電気も水道も止まっていたが、私たちがいるヘルスケアーは自家発電装置があり、電気の確保ができていた。そして、町役場職員の持つ無線機から流れる情報により、今回の震災が「未曾有」の震災であったことが少しずつ分かってきた。

無我夢中で避難所運営を行いながら、片手に携帯電話を持ち子どもたちの安否確認も続けた。やっと義母と連絡がつき、子どもたちの無事を確認することができた。

夜になってやっと水、暖、トイレ、情報、食糧確保という共通の課題が出てきていた。そこで、自家発電設備のある社協と向いの特別養護老人ホーム職員とが協力しあって、おにぎりの焚き出しをすることになった。実家が農家の職員からお米を調達し、給水車から何度も水を運び、夜通しご飯を炊きおにぎりを握り続けた。「子どもたちはお腹を空かせて凍えていないだろうか。このおにぎりを一つでもよいから食べさせてあげたい」そんなことを考えながら、3千から4千個以上のおにぎりを握った。翌朝には手が真っ赤に腫れていた。そして、そのおにぎりを各避難所に届けるため、私たちは停電で真っ暗闇の街の中、橋が落ち倒壊した家、せり上がった道路、安否確認をしながら一晩中走り回った。そして、その後、何日も、おにぎり一個と水だけの生活が続いた。

2．原子力発電所の惨事

「地震がおさまれば家に帰り、家族に会える」職員全員がそう思いながら、徹夜で避難所で頑張っていた。12日の早朝、避難命令が出たときには愕然とした。しかし、私たちには立ち止まり、あれこれ考える時間はなかった。避難所に大型バスが次々到着し、避難する町民の誘導を行った。そして最後に残ったのは、私たち社協職員と自宅に帰れなかった50名ほどのデイサービス利用者と、そして向いの特別養護老人ホームとグループホームに80名ほどの入所者だった。その他、隣接する双葉厚生病院には、数十名の入院患者がいた。

「寝たきりの方を避難させても良いのか?」「ここで残って看ることが良いのではないか?」議論しても結論が出ないまま、あっという間に時は過ぎていった。そして午後3時頃、全身白いタイベックススーツにマスクをした警察官から「避難」との指示があり、大勢の要介護者を連れての避難を決めた。私たちは自衛隊のヘリが迎えに来る県立双葉高校へ重度の要介護者から順番にピストン搬送を始めた。しかし、その瞬間は突然やってきた。「ボーン」という大きな鈍い音。同時に、身体に風を受けた感じがした。向いの特養が動いているように見えた。今思えばあれは衝撃波だったのかもしれない。「ヘルスケアーふたば」は原発から3キロぐらい離れていたのだが……。その瞬間は「どこかでガス爆発が起

こったのか」という感じだった。しかし、一緒に作業をしていた職員の表情を見て、何が起きたのか察知するまでそう時間はかからなかった。しばらくすると空からパラパラと何かの破片や綿くずのようなものが降ってきた。奇妙で不思議な光景だった。空を見上げながら、「本当に、もう終わった」と絶望と恐怖が襲ってきた。双葉町から川俣町への避難の途中、「もう駄目だ。子どもたちには二度と会えない」と思い、妹へ「子どもたちをよろしく」とメールもした。後で、その連絡が家族をパニック状態に陥らせたと聞いた。

避難先の川俣高校に着いたのは12日の夜中だった。そこには電気も暖房もなかった。体育館の床の上に、一緒に避難した利用者30名ほどの人々と肩を寄せ合い寝ることとなった。しかし寒くて眠れなかった。そのような状況であちらこちらで不穏になり、「帰る」と訴え続ける利用者の対応に追われた。トイレもなく、排泄対応も十分できなかった。また、中には寝たきりで食物を摂ることができない人（胃ろう対応）が3、4名いた。お粥も食事の確保できず本当に困った。医療依存度の高い方もいて、一瞬でも気が休まることはなかった。

その後も私たちは要介護者への支援を続けながら、直面する様々な課題をひとつずつ乗り越え避難所を転々とした。

私の夫も同じく社会福祉協議会に勤務しているので、2人は行動を共にしていたが、震災発生から子どもたちとは会うことができなかった。3日目の午後になり、子どもたちも近くに避難していることが判り、やっと再会することができた。子どもたちが私達を見つけて、叫びながら走りよる姿に胸が苦しくなった。涙が止まらなかった。心細く、辛くて、とてつもなく長い時間を過ごさせてしまったような気がして、後悔と自責の念が溢れてきた。涙で「ごめんね」が言葉にならなかったことを、今思い出す。

3．埼玉でのくらし

その後も、私たち社協職員はデイサービスの利用者とともに避難を続け、3月30日、埼玉県加須市にある旧騎西高校の避難所にたどり着いた。当時は「さいたまスーパーアリーナ」からの移動した人たちで、約1400人の町民が避難生活していた。

要支援者、要介護者、障害のある方のほとんど大部分は、さいたまスーパーアリーナ避難中に施設や病院、家族のもとへ受け入れをして頂き、旧騎西高校に移ったときには私たちの元に残った人はいなかった。ただし、支援が必要な家族と同居の人は40名程度いた。ここに来てから各教室に畳を敷いて、その上に布団を引いて寝ることができた。しかし、1400人となると、敷き詰められた布団一枚畳一畳が、「自分の場所」という感じだった。

社協職員も避難所生活だったので、夜遅くまでお年寄りのおむつ交換のため校内を歩いたこともあった。　体調不良も多く見受けられ、お粥の提供が必要となった。その時、思い出したのが避難所に来てくれた淑徳大学の山口先生の「必要なことがあれば何でも言って」という言葉だった。淑徳大学の先輩から、この状況を改めて伝えてもらうと、すぐに電気釜10個が届けられた。さらに大学からはお米の提供もあり、やっと念願のお粥をつくることが出来た。それで生命を繋げた人が多くいたと思う。今でもそのお釜は大切に使わせて頂いている。

4．私たちを支えてくれたこと

最後に私ごとだが、震災当初の2、3日は全く電話が通じなかった。そして、通じた瞬間、多くの人からの留守番電話やメールが開かれた。そこには「家族全員、大丈夫か」というメッセージが溢れ、涙が出るほど嬉しかった。特に大学の恩師や部活動の監督からのメールが大きな励みとなり、勇気をいただいた。

本当に「絆はあるのだ」と思った。そこから、新たに広がる「人と人との絆」が有難かった。大学の友人や部活動の仲間が連絡を取りあい、私たち家族が避難所から出てアパートに住み始めようと思っていた時も、まさに「トラック1台分位の家具を集めたから持っていく」という申し出があり涙が止まらなかった。そして、今では「これは○○さん。これは○○さんから貰ったもの」と、本当にたくさんの愛情に囲まれた部屋で、生活をしている。

今後の生活設計については、「再び双葉町の人と何処かに移動するのか」「どこに仮の町をつくるのか」など、今は具体的には進んでいない。「私たちの未来」が何処にあるのかも全くわからない。しかし、社協職員である以上、日々の福祉に係る活動を続けて行かなければならない。同じ避難生活者だからこそ理解できることや、同じ目線からでなければ見えないこともたくさんあることを実践で痛感している。それを一つでも多く解決へ導いていくことが、

使命のように感じている。

以上、書いたような状況にも関わらず、我が家の子どもたちは無事に、昨年は長男が小学校入学、今年は長女が幼稚園に入園した。そして、今も元気に通っている。その一方で、福島県内の子ども達はマスクをして、長袖・長ズボンで、校庭で遊ぶこともできない時期があった。それを思うと埼玉県に避難して来た我が子たちが、自由に遊べることは幸いだったのかもしれない。今やっと、福島県も少しずつ落ち着いて来て、外で自由に遊べるようになったことが何より喜ばしい。

確かに、いつかは落ち着ける土地に家を再建し、家族みんなで住みたいという希望はある。しかし、今は何よりも「子どもを絶対に守らなければいけない」という思いだけである。何故ならば、あの時「もう、二度と子どもたちと一緒に住めないかも……」と思ったから。だからこそ、子どもたちと今一緒に生活ができていることをうれしく思い、子どもたちとの暮らしを守り続けるために努力し続けたい。